

書評

村本邦子著

『周辺からの記憶——三・一一の証人となった十年』
(国書刊行会、2021年)

酒井 朋子

1. 10年間通い続けて

臨床心理学者の村本邦子氏は、ある日京都の大学のキャンパスを歩いていて、軽い眩暈を感じる。「気をつけなければ」と思ったという。多忙なスケジュールが続いているため疲労が蓄積しているのだと考えたのである。「ほどなく、それが地震で、東北が大変なことになっているらしいというニュースが飛び込んできた」(p20)。2011年3月11日のことである。

翌日は原発に異変が起こっているらしいという話を聞き、13日には不安を抱えながらニューヨークに出張し、数日間、国内とはまた違った角度から東日本の状況を見たという。

その後村本氏は、所属する立命館大学のプロジェクトにたずさわり、10年以上にわたって毎年、東北太平洋沿岸の4県、青森・岩手・宮城・福島に通うことになる。もともと村本氏は臨床の現場で多くの社会問題と出会い、それらに関心をもって研究を進めてきていた。家庭内暴力、性暴力、虐待などの問題に取り組んできており、対人援助学についても著作があった。震災直後、村本氏は阪神淡路大震災のときの経験をふりかえり、「細くとも長く、我が事として関わり続けることのできる方法をじっくり考えよう」と思ったという(p24)。そうしたかかわりのなかで出会ったエピソードを短いエッセイ調の文章として書いてゆき、10年分をまとめたものが本書『周辺からの記憶』である。

収録された文章は、数にして120以上。ほとんどすべてが見開き2ページに収まる長さで書かれている。これら多数の断片的エピソードを通し、2011年からの1年1年を地域と人びとがどのように過ごしてきたのかが示される。喪失や苦しみをめぐり内容も多くふくまれるが、文章は総じて飾りが少なく、簡潔につづられている。

取り上げられる話題はさまざま。たとえば宮

城県多賀城市で、建物が被災したのち新しい物件が見つからずトレーラーハウスで再開した保育園について。あるいは福島県富岡町の、原発から12キロの場所で、数えきれないペットや家畜に餌をやりながら暮らし続けるMさんのこと。東日本から京都に避難してきた人びとに向けた企画の記述もある。著者がプロジェクト拠点から東北地方の各地に足を伸ばすなかで出会った数々の情景や語りがつづられていく。テーマや地域の焦点は、とくに定められてはいないようだ。2ページの文章のなかでも舞台や話題がすいすいと変わっていくので、もっと掘り下げてほしい、詳しく知りたいと感じる箇所もある。けれども簡潔な文章のあちこちに、普遍的な問題につながる洞察や発見が光っている。

2. レジリエンス、遠い土地から東日本を思うこと、津波でんでこ

たとえば震災の直後に大学のプロジェクトのありかたを模索していたときの記述で、著者は次のように書く。いわく、「心のケアをします」というのを直接の目標にして地域に入っていくアプローチはうまくいかないことが多い。「遊び、アロマ、工作、手芸など何かを一緒にすること、自然な日常の時間を一緒に過ごすことの中から生まれてくる会話や出会いに力がある」(p27)。

東日本大震災の直後には各地で手仕事活動の集まりがさかんになったが、そのこととも響き合う指摘である。手仕事活動では、人びとは仮設住宅の集会所などに集まって、刺繍や編み物、縫い物をしながらおしゃべりをし、お茶を飲んだ。中にはそうした活動が生産と販売のシステムを確立させて、ビジネスになっていったケースもある。しかし当初人が集まってきた動機としては、職場や自宅を失い、仕事や隣人との行き来もなくなり、「することがなくなってしまった」なかで、他の人と一緒にものづくりに取り組むことによって無為の時間を埋める、あるいは「何かをしている」という実感を得る、という部分が大きかったように思われる。「心のケア」といったときにめざされているものが、何かの活動を通じて人びとのレジリエンスが活性化することによって副次的に実

現することがあるのだ。

なかには日本の東北から遠く離れた場所での出来事もある。「山の上から見える風景」と題された文章は、2013年の夏、著者がオーストリアのアルプスにいたときの経験にまつわるものだ。山小屋で一休みをしていて出会ったグループのなかに、2011年、IAEA（国際原子力機関）科学者として原発事故の調査のために日本を訪れた、と言う人がいたという。2013年時点で問題になっていた原発の汚染水処理について著者が口にする、海では放射線濃度が薄まるので問題ない、と答えた。彼はモロッコ出身で、苦勞のちにフランス留学を果たし、結婚していまもフランスに住んでいるという。「こうして世界のトップに上り詰めた人たちが世界の原子力政策を司っているのだ」と、著者は書く。「一般論として、ヒエラルキーの上の方にいる人たちの話を聞くと、世界は理想論、もしくは願望論で回っている。社会の底辺層の人たちと話す、そこからこぼれた醜く扱いにくい問題の吹き溜まりになっている。どこで誰の話を聴くのが重要なのだ」（p121）。

願望論、という言葉はここでは掘り下げられることはないが、なんともふくみがある。トップ・エリートたちが現実として提示するものは、彼らの活動や理念が意義をもち、うまくいくために「こうあってほしい」と願うビジョンであって、それが「こうであるに違いない」という現実認識にすり変わっている。そこでは都合の悪いものが塗りつぶされていたり、人びとの毎日の生活をとりまくローカルな条件がとるに足りないものとして無視されていたりする。汚染水放出現場の近くで漁をし、農作業をし、外で遊び、ものを食べる住民が、現在と将来についてどのような不安と葛藤を抱えるのかという地べたからの視点はそこにはない。

あるいは「津波でんでこ（津波でんでんこ）」にまつわるエピソードがある。よく知られているように、「津波でんでこ」とは「津波の時には各自がでんでばらばらに逃げよ」という意味の言葉で、明治三陸津波（1896年）や昭和三陸津波（1933年）など大規模な津波被害を繰り返してこつてきた岩手や宮城北部沿岸の広い地域で伝えられて

きたものとされる。東日本大震災直後にはメディアでも頻繁に取り上げられた。民間伝承のなかの防災的な教えとして考察されることもあるようだ。日頃からこれを家族や近い人間のあいだで相互確認しておくことで、迅速な避難が可能になる局面も、もしかするとあるのかもしれない⁽¹⁾。

ただしこの「教え」は、身近な人が一人で逃げられない場合には実践できない。言い換えれば受け入れがたい恐怖につながるあやうさと不安をはらんだ言葉であり、津波という出来事の凄まじさを感じさせる言葉でもある。

本書の「2015年 宮城、岩手」という章に収録された「田老の学ぶ防災」と題された文章で、この「津波でんでこ」が言及される。岩手県宮古市で開かれた防災イベントで聞いた体験談だという。語り手は震災時、浄土ヶ浜のボート観光で働いていて「津波でんでこで、自分も高台へ逃げた」。自宅は浜の近くにあり、義母が流され亡くなったという。「あの時戻っていたらと思うこともあったが、夫とその話題はできない」（p192）。酒が入るたびに戦争と昭和の津波について話していた義父の体験談を聞き流していたことを、いまは後悔していて、自分も被災体験を語り続けなければと感じているという。

たった数行だが、複雑な印象を残すエピソードである。ここにおける「津波でんでこ」とは、必ずしも公共的な知恵のようなものではなく、その言葉が呼び起こされる被災の状況の、極度の破壊性を思わせるものである。そしてそれは、悔いや自責、長く続く自問の思いとわかちがたく結びついた言葉であるということがわかる。上述の語り手のケースでは、戻った人たちの多くは流されたのだという。そのような、助けに戻っていればもろともに死んでいたような状況であったとしても、「夫とその話題はできない」。亡くなった人の存在が、消えることのない空隙となって生き残った人びとの関係のなかにぼっかりと横たわっているさまを、エピソードを読んで思い浮かべた。

3. 証人として〈聴く〉

この宮古市でのエピソードにも通ずることだが、本書は誰かにとって、あるいは社会にとって

直接的に〈役に立つ〉という関心からやや距離をとっているように思われる。この本のアプローチを特徴づけるのは「被災と復興の証人となる」(p16)という立場である。「私は、初めから、東北の地で誰かの『心のケア』をするつもりはなかった」と著者は書く(p15)。「限られた時間ではあるが、ひっそりとその土地に身を置き、共に過ごす許しをもらって、その地に暮らす人々の豊かに学びたいと願った」(p15)、「長く被害者のトラウマ臨床に関わってきたので、専門家としてできることなど皆無に近いと知っている。ただひとつ確実にできることと言えば、不運や苦境を生き抜く人の証人として存在することである」(p26)。

このようなアプローチをとったとき、人は〈自分は何を教え何をしてあげられるのか〉、〈自分の活動の社会的な意義は何か〉といった、〈わたし〉を中心とする問いをひとまず横に置くことになる。かわりに目の前にいる人や、目の前に広がる場と土地に意識をこらす。そうしてはじめて、困難を抱える人や、災厄にみまわれた人の言葉や行動のなかに流れる抑揚や多声的なトーンが聴えてくるようになる。

〈聴こえてくる〉と書いたのは、鷺田清一の「〈聴く〉こととしての哲学」が、ここでやはり思い出されるからだ。鷺田によれば、〈聴く〉というおこないとは「なにもしないで耳を傾けるという単純に受動的な行為なのではない。それは語る側からすれば、ことばを受け止めてもらったという、たしかな出来事なのである」⁽²⁾。

そして〈聴く〉ということは、向こうから自分の領域に入ってくる音を〈こちら側で〉感知し解釈することを前提としない。目の前の人や、いまそこで起きている出来事にむかって感覚器官を投げ出して、〈向こう側〉において見聴き〈しようとする〉ということだ。さもなくばそれらの人や出来事を、自分があらかじめもつ思惑・前提・枠組みを超えうるものとして受け止めることは不可能になる。

〈証人になる〉という姿勢は著者自身の悔恨ともかかわっている。福島原発事故に関して、著者は次のように書く。「都会で便利な生活を営みながら、いつの間にか五十四基もの原発が作られて

いたことを認識していなかった自分は、無関心という形で加害者の側にいたと思った」。戦後復興が経済効率に照準を合わせてきたことのひとつの帰結として福島原発事故があったのだとすれば、今回の震災からの「復興」のなかで同じことを繰り返してはならない。「ここから先は、単なる復興ではなく、長期的視点でもって、私たちの社会がこのシステムをどのように立て直していくのかが問われている。不公平で抑圧・搾取に満ちた復興を許さない眼で見続けること」(p26)。

こうして見てみると、〈証人〉であろうとするこの態度は、著者の信じるなんらかの社会的なくよさへとつながっている。将来的な害悪を防ぐための立場であるという意味で、広義における〈役に立つ〉ことと無関係ではない。しかしそれは、特定の個人や自治体にとっての直接的な有用性を求める向きとは異なる方向性といえるだろう。

4. 普遍性を志向することは文脈を消し去ることなのか

著者の村本氏が代表をつとめた立命館大学人間科学研究科のプロジェクトは、「東日本・家族応援プロジェクト」と題されたもので、2011年3月の東日本大震災ののち10年間にわたっておこなわれた。現地の対人援助機関と協働して被災と復興にかかわる生活課題を浮き彫りにすることをめざしたもので、プロジェクト型学習として大学院教育のなかにも位置づけられたという⁽³⁾。漫画家・臨床心理士の団士郎氏、社会病理学・臨床社会学の中村正氏とともに村本氏が企画し、漫画展を中核に、支援者や家族向けのプログラムをプラスして、現地の方々と自然に出会える場を作るよう心がけたと本書にはある。青森県ではむつ、岩手県では遠野、大船渡、宮古、宮城県では多賀城、石巻、福島県では福島市などの地域でおこなわれてきたようだ。

10年間にわたって活動を継続するのは並大抵のことではなかったはずである。当初の数年こそ社会的な関心も全国で高かったが、西日本であれば、やはり距離が離れていることもあって、少しずつ状況は変わっていっただろう。東北太平洋沿岸地域がメディアで取り上げられる機会はほとんど

ん減り、助成の機会も減っただろう。2016年の熊本地震や2018年豪雨など、西日本でも各地で深刻な自然災害が起きた。わたしは2011年から2018年まで仙台に住み、その後に関西に移動したが、「被災」という語がもつ感覚の地域的な差はあるように感じられる。そうした意味でも、京都という場で学生に対してプロジェクトの重要性を呼びかけ続け、巻き込み続け、多数の場所との関係を継続したことは高く評価されるべきである。

とはいえ、本書『周辺からの記憶』は、「東日本・家族応援プロジェクト」の結果生まれた本ではあるが、その記録として書かれたものでは必ずしもない。プロジェクト企画にふれた文章もあるが、むしろ企画の前後に著者があちこちの市町村を訪れ、沿岸線を走り、被災地のツアーに参加するなどして見聞きした事柄についてのものが多い。プロジェクトの各回のイベントがどこで、どのように開催され何人くらいが参加したのかといった情報も多くは記されない。そうした情報は大学研究科のウェブサイトで見ることが出来る。本書に託されているのは別の意義であるようだ。

これにかかわって、本書を読んでいて感じたことを最後に少し記しておきたい。疑問や批判というよりは、災厄とともにある人の生を描こうとするところみが抱える難しさを、再度考えるきっかけとしてである。10年間にわたる「東日本・家族応援プロジェクト」では多賀城、遠野、むつなど継続的に関係を作ってきた場所もあるようで、たがいをよく知る人間関係も生まれたと思われるが、そうした関係をうかがえる文章は本書にほとんどない。むしろ意図的に排除されている。冒頭には本書が「すべてを短い読み切りの物語とすることで、個人の詳細には入らず、いわば誰にでも起こりえる普遍的な物語として読んでもらえることを目指した」ものであること、「結果として、長い関係を結んできた人々の物語はあまり描かれていない」(p16)ことが明記されている。

場所についても同じだ。何度か登場する街や村があるが、地域の背景情報がまとまって記述されるわけではなく、出来事やエピソードを伝えるために必要最低限の情報がそのつど示されるにとどまる。空気や風景の質感までを伝えてくる種類の

文章ではない。ゆえに、ひとつひとつの地域の印象は残りづらい。

人類学者としてのわたしには、この点は物足りなくも感じられた。人類学は、クリフォード・ギアーツのいうところの〈厚い記述〉を通じて人の暮らしを描こうとする学問領域である。背景となる過去の文脈や、人と人および人とモノのコミュニケーションやかかわりのありかた、生活をとりまく地理的・気候的条件などもふくめ、広範囲のものごとを微に入り細を穿って描写していくことで、多岐にわたる文脈と質感あるイメージを読み手に伝えようとする。比較的近年の問題関心としてあらわれてきた日常倫理の問題系、すなわち一般の人が〈よさ〉〈悪さ〉をいかに感じ、模索しながら毎日を生き、他者とかかわろうとしていくのか、といった研究関心においても〈厚い記述〉は不可欠の手法である⁽⁴⁾。

東日本大震災後にあらわれた懸念すべき事柄のひとつとして、東北=被災地というイメージの一元化・単純化があったとわたしは認識している。しかし東北から北関東の太平洋沿岸の町と村は(ほかの地域もそうであろうが)、それぞれの歴史背景と暮らしの様式をもち、似ているが異なりもする地理的条件を有しており、そこには繊細で豊かな差異があったのである。この視点をわたしは、環境社会学者の故・植田今日子さんから教わり、彼女のひきいる共同調査にかかわらせてもらうなかで実感するようになった。たとえば2012年から2013年にかけての気仙沼市唐桑半島での調査である⁽⁵⁾。もちろん半島全体で共有された特徴も多々あれど、震災前には高台、漁港、港町と、集落がそれぞれ異なる場の機能と雰囲気をもっており、住民の方々の記憶のなかで大きな意味をもっていたことが印象的だった。生活史に彩りをもたらしていたそのような多様性は、可視的なレベルでは大津波によって押し流されてしまった。けれども住民の方に話を聞かせてもらったり、長く土地を歩いていたりすると、多くの情感が浮かび上がってきた。

本書の文章のなかで、多くの場合、地名はとくに隠されていない。土地勘のある人間なら地名を見ただけで多くのことが了解されるかもしれな

い。けれども地図が付されておらず、地域についての説明も少なく、ある場所からある場所へと記述が2ページごとに、ときには数行ごとに入れかわるなか、本書の「物語」に登場する場所や地域について何かを感じることは、東北にゆかりのない読者には難しいのではないか。そしてその中を移動し、それぞれの場所と多様なかわりをもつ人びとの営みも、また伝わりにくいのではないか。もちろん多様な被災状況にさまざまに対処する人びとの姿は描かれている。しかし前述したように、その人たちの生活史が掘り下げられることは少ない。彼ら彼女らをとりにまく環境の、震災前・震災後のありかたは、わずかな情報だけでは思い描きにくい。それゆえに〈東北の被災者と被災地域〉という記号的な枠組みを超えたものを伝えきれていないのではないか⁽⁶⁾。

個人の詳細をはぶくことで普遍的な物語を書こうとした、と本書には書かれている。地域の背景情報についても同じだっただろう。たしかに個別のなじみのない情報を長々と示すことで、読み手に負担を与え、遠ざけてしまう危険もある。その懸念はわたし自身もいつももつ。出し方は簡単ではない。しかし、ある人（人びと）や場所を、その人・その場所たらしめている背景の文脈とともに細かく掘り下げ、微細な襞まで描くことで、逆説的にそこに普遍性が生まれることがある。記号的なイメージから五感にうったえるイメージへの変化とでもいおうか、記述の向こうにいくつもの生がたしかに息づいているのだと感ぜられることがある。

とはいえそこには難しさや問題もあることを、理解もしている。とくに人について書く・描写するというおこないは、根本において暴力性をはらむ。大前提としてプライバシーの問題があるが、それだけではない。記述し、描き出し、それを公的な場所に出すことの権力性をめぐる問題がある。ある人の肖像を、過去や環境をあわせて描き出そうとするとき、詳細であればあるほど本人の認識とは異なる物語になりやすい。本書の冒頭で書かれてもいる「本人の許可と確認をどこまでとるべきか・とることができるのか」という問題が、つねにつきまとう。個々人についての記述はさら

りとした短いエピソードにとどめるとというのが、選択肢のひとつであることはたしかなのだ。

歴史的、社会的、政治的な災厄を人が生きるありかたを、いかに書き、公にすることができるのか。その記述の模索は、〈証人〉になることとどのようにかわってくるのか。本書を手がかりに、引き続き考えていきたい。

注

- (1) 矢守克也「津波でんでんこ」の4つの意味『自然災害科学』31(1):35-46、2012年。
- (2) 鷲田清一(2015)『「聴く」ことの力—臨床哲学試論』筑摩書房。
- (3) 立命館大学人間科学研究科ウェブサイトでは、このプロジェクトのねらいや活動報告、広報資料などがまとめられている (<http://www.ritsumei.ac.jp/gshs/info/detail/?id=27>、2022年4月13日取得)。
- (4) たとえば以下を参照。M. Lambek (ed), *Ordinary Ethics: Anthropology, Language and Action*, Fordham University Press, 2010; J. Laidlaw, *The Subject of Virtue: An Anthropology of Ethics and Freedom*, Cambridge University Press, 2014.
- (5) 東北学院大学トポフィリアプロジェクト『更地の向こう側—解散する集落「宿」の記憶地図—』かもがわ出版、2013年。
- (6) ただしこの点は、後半になるにつれて若干解消もされたように感じられる。2018年、2019年の文章では、地域の背景が筆者のいう「物語」のなかでより大きな意味をもっているように思われた。